2018年9月1日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

・読み：第4章1～10節

・引用：第4章34,36,37,38,39,42節、第9章30節

「罪を取り除く方法⑨」ティールタ・ヤットラ(Tirtｈa Yatra)の続き

　前回の「聖地巡礼」について補足します。

聖地巡礼は罪を取り除くためのひとつの方法でした。

巡礼の場所である聖地はいかにして聖地となったのか、について話しました。

神によって、聖者によって巡礼の聖地になった場所もありますし(弘法大師と高野山など)、王がある場所に神を祀る寺を建て、そこに徐々に人々が参拝することで聖地となった場所もあります。聖地を訪れた巡礼者はその場所の霊的波動の影響を受けますが、その逆もあります。

**巡礼者の力でその場所が聖地となる**

Tirthi Kurvanti Tirthani　(ティールティー　クルヴァンティー　ティールターニ)

ティールティーは巡礼者のことですが、ここで言う巡礼者とは普通の人ではありません。

特別なレベルの聖者が訪れることによって、その場所の霊的波動がさらに深くなるのです。

たとえばベナレスはもともとシヴァの場所ではありましたが、神の化身であるシュリ・チャイタンニャやシャンカラチャーリヤ、シュリ・ラーマクリシュナなどが訪れることで、さらに神聖な場所になったのです。

クルヴァンティーは「作る」という意味ですが、ここではそこを訪れた聖者の波動がその場所に「影響を与える」ということです。

以上が聖地巡礼に関する補足でしたが、前回までで説明が終了した「罪を取り除く方法」について全体的な総括をしてみます。

全部を完璧に実践することは難しいので、その中でも皆さんにとって何が重要かを知っておくことは必要です。

**＜「罪を取り除く方法」の重要なポイント＞**

**① 後悔**(repentance)

　まずは後悔ですが、ただ後悔するだけではなく**「二度と過ちを犯さない」という決意を伴った後悔**のことです。

悪いこと、非道徳的なこと(盗み、他人を傷つける、嘘をつくなど)を深く後悔することであり、本当に後悔するなら心は深く苦しみ悲しむので、「同じことを二度とするまい」と強く思うはずです。もちろん人間は同じ過ちを再び繰り返すことはあるのですが、それでも「今後は過ちを犯さない」という誓いは必要です。

ここでひとつ注意すべきことがあります。

**以前の過ちを後悔するあまり、いつまでもそれに固執してそれから離れられない人がいます。**

これは良いことではなく、このような状態にいる限り幸せも得られませんし、霊的に前進することもできません。

『バガヴァッド・ギーター』にドゥリティ(dhrtih:不屈)という言葉があります。

過去の過ちを後悔してそれにこだわり続けるような態度は、鈍感なタマス的不屈です。

(註記：ここで言う不屈とは決めたことを粘り強く続ける頑固さの意味であり、第18章35節でdhrtihは「決意」と訳されています。)

怠け者は同じ状態をずっと続けたまま、それを変えようとしません。

後悔するのは良いのですが、それにも限度があります。

ある時点で後悔は消えなければならないのであり、そうでないと考え方が後ろ向きになります。

罪をなくすための後悔は前向きでなければなりません。

私のところにもこの種の後悔に束縛されていて、どうしたらそれから抜け出せるかと相談に来る信者がいます。

潜在意識の中にある後悔の念が時々浮かんできて、それに苦しんでいるのですが、皆さんにも同じ経験があると思います。

この問題を解決する方法にはギャーナ・ヨーガ、バクティ・ヨーガの二つがあります。

**② ２つの解決方法**

**A. ギャーナ・ヨーガ的アプローチ**

ギャーナ・ヨーガでは「私の本性は純粋である」と教えます。

そしてその純粋な私が罪を犯したのは、無知が原因であると考えます。

私の心の中には過ちに対する後悔がありますが、本当の私は心ではなく純粋な魂です。

罪という概念やそれに対する後悔は心のレベルに存在します。

自分自身を心と同一視している限り、この後悔から離れることは困難です。

自分を魂(純粋な自分の本性)と同一視すれば、潜在意識に後悔があっても心の影響はなくなります。自分と心を同一視すると、「私は罪人」という考えが生まれます。

そうではなく自分と魂を同一視するなら心の影響はなくなるのですが、この自分と魂の同一視はまずは知性のレベル、より深くなると自我のレベルで行います。

皆さんはまずは知性のレベルで「私は心ではなく魂だ」と同一視してください。

知性のレベルで変化すれば心の影響はなくなります。

これがギャーナ・ヨーガの方法です。

心は良いことや悪いこと、いろいろなことを思い出します。

自分を心と同一視すると、自分自身も心と同じように落ち着かなくなります。

落ち着かない状態で安定した幸せは得られません。

肉体はある時は元気ある時は疲れている、というように変化しますが、もし自分を肉体と同一視するなら、元気だったり弱っていたりと安定しません。

同様にある時は良くある時は悪い、ある時は喜びある時は苦しむ、というように絶えず揺れ動くのは心の性質(nature)です。

幸せのためには心ではなく魂(アートマン)と自分を同一視しなければなりません。

ヴェーダーンタは**「自分を肉体でもなく心でもなく魂と同一視してください」**と助言します。これはギャーナ・ヨーガの識別による方法です。

もうひとつのバクティ・ヨーガは神に任せるという方法です。

**B. バクティ・ヨーガ的アプローチ**

神に任せるというのには二つの意味があり、ひとつは神に赦されその**恩寵で罪が取り除かれる**、ということです。

もうひとつは、すでに犯してしまった罪の結果自分は悪いカルマを作ってしまっていて、そのカルマが今後の人生で自分に何らかのマイナスをもたらすのではないか、という今後の**不安を神の恩寵で払拭してもらう**、ということです。

神の恩寵で悪いカルマがもたらす苦しみ、悲しみは小さくなります。

このような信仰で罪の問題を解決します。

神は警察官ではなく、我々を赦してくれ、また将来の危険から守ってくれます。

ホーリー・マザーも、「神の恩寵で我々に降りかかる災いは小さくなる」と言っています。

シュリ・ラーマクリシュナは信者の「私が犯した過ちの報いは必ず受けなければならないのでしょうか？」とういう質問に対して、何度も「心配はいりません。神の名を唱えたのだからすべての罪は取り除かれる、という**強い信仰を持って神の名を唱えてください**」と答えました。

「私は母なる神(マザー・ドゥルガー)の名を唱えたのだから、どれほど罪を犯していようと、彼女の恩寵ですべて取り除かれる」という言葉は、『ラーマクリシュナの福音』の中に何度も出てきます。信仰がなくただ神の名を唱えても意味がありません。

これがバクティ・ヨーガの方法です。

罪を取り除くということとの関連で話していますが、神の名を唱えたり神に祈ったりすることの目的が罪を取り除くためだけであるうちは、まだ後ろ向きの行為です。

もっと前向きになると、だんだん神が好きになり、神のことを考えたくなり、神聖になりたいと思い神の名を唱えるようになるのであり、これが理想です。

たとえば病気になると、皆さんは薬を飲み食餌療法をしますが、それによって二つの結果がもたらされます。病気が治り、そして体が元気になります。

二つのことが別々にではなく一緒に起こります。

(註記：病気が治る＝罪がなくなる、元気になる＝神聖になる　　ことのたとえ)

**③ 神聖な交わり**(Holy Company)

　罪を取り除くためにはこれも重要です。

霊的レベルの高い僧侶と話したり、そのような人がいる場所を訪れて時間を過ごしたりすることで純粋になることができます。

次に第4章36～39節、42節を読んでください。

***たとえ君が極悪の罪人だとしても、この大智の舟に乗るならば、あらゆる苦痛と不幸の大海を、難なく渡りきって行けるであろう。//4-36***

***おおアルジュナよ！　燃えさかる炎が、薪を焼き尽くして灰にするように、この智慧の火も、あらゆる行為の業報を焼き尽くして、灰にしてしまうのだ。//4-37***

***この大いなる智識こそ、この世を浄化する無上の力なのであり、ヨーガの修行を完成した人は、その知識が実は自己の中にあることを悟るに到る。//4-38***

***篤い信仰心をもつ人は、感覚の欲望を制御することで、この無上の智識を得、速やかに究極の平安の境地に到る。//4-39***

***されば、バーラタ王の子孫(アルジュナ)よ！　己の心の迷いと疑いを智識の剣で断ち切り、精神をヨーガに集中し、さあ、立ち上がって戦いなさい！』と。//4-42***

これらの節の中に*「大智の舟」、「智慧の火」、「大いなる智識」、「無上の智識」、「智識の剣」*というように、何度もギャーナという言葉が出てきます。

このギャーナは「智識」と翻訳されていますが、「知識」という言葉だけを聞くと、普通の人は誤って理解してしまいます。

(註記：そのことを考慮して協会本では知識ではなく、あえて智識という表記を使っています)

皆さん「知識」とは何だと思いますか？

簡単に言えば「知識」とは勉強して得られるものであり、自然科学、人文科学など知識を得るためのいろいろな学問があります。

しかし『バガヴァッド・ギーター』の「智識」をこれらの学問的な知識のことだと考えていいでしょうか?　もちろん違います。

ギャーナの智識とは霊的な知識のことです。(spiritual knowledge)

「知識」という言葉から皆さんは勝手にイメージを作り上げがちであり、これが聖典を独学する時の問題点です。

『バガヴァッド・ギーター』の翻訳書はたくさん出版されていて、そのどれにもいたるところに「知識」という言葉が出てきます。

もちろん皆さんも「知識」という言葉は知っていますが、それを皆さんなりの先入観で理解しています。

聖典の中の「知識」という言葉の意味は皆さんが考えるのとは全く違い、それが聖典を翻訳書で読んで学ぶことが難しい理由です。

ですからしかるべき師について学び、注釈書も参考にしなければならないのですが、その注釈書も先生から教わらなければ理解できません。

以前ヨーガ・ヤッギャーについて第4章25～30節を説明しました。

いろいろな種類のヤッギャーがありましたが、覚えていますか？

またそれに関連して、パタンジャリ『ヨーガ・スートラ』についてもかなりの期間をかけて説明しました。

このヤッギャーについて覚えておかなければならない大事なことは、すべてのヤッギャーの中で**ギャーナ・ヤッギャーが最も重要**である、ということです。

もっと純粋になりたい、霊的になりたい、天国に行きたい、などヤッギャーの目的はいろいろあります。ではそのヤッギャーの中で、なぜギャーナ・ヤッギャーが最高なのでしょうか？

ギャーナの結果は2つあり、すべての罪を取り除くだけでなく、それによって清まり神聖になり、解脱することまで可能です。これがギャーナ・ヤッギャーが最高とされる理由です。

**・真理の知識**

ギャーナとは自分の本性がアートマン(魂)であると悟ることです。

さらにその魂の本性はサッチダーナーンダです。

(サット:絶対の存在 チッタ:絶対の知識 アーナンダ:絶対の至福)

これが霊的な知識です。

少し詳しく説明するなら、絶対の真理(ブラフマン)と魂(アートマン)は同じものであり、レベルが違うだけです。ですからブラフマンの本性もサッチダーナーンダです。

すべてのものは一時的であり、ブラフマンとアートマンのみが永遠です。

すべてのもの(人間、生き物、宇宙)には始まりと終わりがありますが、たとえば一時的である宇宙と永遠な魂とは別物でしょうか？　そうではありません。

ブラフマンがすべてのものに成ったのですが、その**ブラフマンの顕れ方が一時的**なのです。

ブラフマンと宇宙が別物だとするなら、二つのものが存在することになり、二つの別々の存在が両方とも永遠で無限であるというのは矛盾です。

ブラフマンも無限、宇宙も無限というのは矛盾であり、無限はひとつだけです。

ブラフマンそのものと、我々が見ている宇宙として顕れているブラフマンとは何が違うのでしょうか？　真理は永遠ですが、真理の顕れは一時的なのです。

たとえば金は永遠で、それから作られたブレスレット、ネックレス、イヤリング、ノーズリングなどの装身具は一時的です。

海の波は現れてはなくなりますが、海はなくなりません。

海の顕れである波は一時的で、海そのものは永遠です。

これらのたとえで少しはイメージできたでしょうか。

**宇宙は一時的ですが、その基礎であるブラフマンは永遠です。**これが真理の知識です。

もう一度36節を読んでください。

***たとえ君が極悪の罪人だとしても、この大智の舟に乗るならば、あらゆる苦痛と不幸の大海を、難なく渡りきって行けるであろう。//4-36***

英語同様サンスクリットの形容詞には、日本語にはない比較級、最上級の表現があります。

(e.g. good-better-best bad-worse-worst)

Papakrit(パーパクリット) 　 罪人

Papakrittara(パーパクリッタラ)　　　　　ひどい罪人

Papakrittama(パーパクリッタマ)　　　　　最悪の罪人

Papa(パーパ)は以前も説明しましたが罪のことで、パーパクリットは罪人のことです。

普通は罪人のことをPapi(パーピ)と言います。

*極悪の罪人*と訳されているのは、最上級のパーパクリッタマのことです。

ここでは罪の大きさを海にたとえていて、その海も知識の舟で渡れると言っています。

次に37節を読んでください。

***おおアルジュナよ！　燃えさかる炎が、薪を焼き尽くして灰にするように、この智慧の火も、あらゆる行為の業報を焼き尽くして、灰にしてしまうのだ。//4-37***

あなたは舟で罪の海を渡りました。しかし海はまだ存在しています。

またその海に戻ってしまう可能性があります。

しかし37節では知識の力を火にたとえていて、火が薪を焼き尽くすと後には何も残らないように、罪が消滅することを表しています。ギャーナによって我々のカルマはすべてなくなります。

以前カルマには3種類あることを説明しました。

①サンチタ・カルマ(Sanchita-Karma) :前世で蓄積されたカルマの全体

②プラーラブダ・カルマ(Prarabdha-Karma):今生を形成するカルマ

③クリヤマーナ・カルマ(Kriyamana-Karma):今生で新たに生じるカルマ

サンチタ・カルマには良いものも悪いものもあります。

サンチタ・カルマのうち全部ではなく一部が今生に影響を与えるカルマであり、それがプラーラブダ・カルマです。

さらに今生の行いによって新たに生み出されるのがクリヤマーナ・カルマであり、その人の以後の人生に影響を与えたり、使われなかった部分はサンチタ・カルマに回収されたりします。

37節の表現を借りれば、ブラフマンの知識でサンチタ・カルマをすべて消滅させることができます。サンチタ・カルマが残っている限り、人は再びこの世に誕生します。

たとえば植えた種はやがて芽を出しますが、もし種を焼いてから土の中に埋めたとしても、それが芽を出すことはありません。

たとえサンチタ・カルマを焼き尽くした人がいたとしても、その人はその人生を終えるまでプラーラブダ・カルマの影響を受け続けなければなりません。

ここでサンチタ・カルマを焼き尽すとはもう再生しないことを意味し、それはつまり悟りです。

悟りと同時にこの世を去る人もいますし、悟った後も人生を続ける人もいます。

後者の場合、彼が今生で作ったクリヤマーナ・カルマのうちの良いカルマは彼をサポートしている人達を助け、悪いカルマのほうは彼を批判し敵対している人達に向けられます。

(註記：これら3種類のカルマについては2016年4月の講話で説明されています)

**罪人でも解脱できるというこれらの考え方は、とても楽観的です。**

第9章30節を見てください。

***たとえ極悪非道の者であったとしても、もしその者がひたすら私を信じ礼拝するならば、彼は善人とみなされよう。なぜなら、彼は根本において正しい決意をしているからである。//9-30***

やはり大変楽観的であり、*極悪非道の者*でも聖者になれると説いています。

実例があります。

悪人だったラトナーカラは聖者ナーラダの力によって、聖典『ラーマヤーナ』の著者ヴァールミーキへと変身したのです。

ナーラダはラトナーカラにラーマ神の名を唱えることを教え、それを忠実に守ったラトナーカラは聖者になったのです。

仏教にはアングリマーラ、キリスト教にもマグダラのマリアの例があります。

『ラーマクリシュナの生涯』の中にもギリシュ・チャンドラ・ゴーシュの例があります。

『バガヴァッド・ギーター』も例は挙げていませんが、罪人が聖者になることができると言っています。

**・なぜ罪を取り除けるのか**

罪を取り除くことについてお話ししていますが、それは本当に可能なのでしょうか？

罪を取り除くことは可能であり、その理由は**罪が永遠ではないから**です。

まずはこのことを理解してください。

「なぜ皆罪を犯したくないのに犯してしまうのか？」、とアルジュナは質問しました。

それに対してシュリ・クリシュナは、「トリグナの中のラジャスが原因である」と答えました。

ラジャスから生まれるカーマ(欲望、肉欲)とローバハ(必要以上に欲張ること)が罪の原因です。

ラジャス的な性質の影響で人は罪を犯しますが、ラジャスを含めてグナは皆一時的であり、それはマーヤーとプラクリティから生まれています。

プラクリティにはサットワ、ラジャス、タマスの三性質があり、ラジャスそしてタマスの影響で我々は罪を犯しますが、罪の源であるグナは永遠ではないので、罪も永遠ではありません。

永遠なものは魂であり、魂は清らかです。

別の見方をすると我々は無知の影響で罪を犯しますが、知識を得て**無知がなくなれば、必然的に罪も消えます。**

**・罪は一瞬で消える**

知識を得た場合罪はどのように消えるのか、たとえでお話しします。

500年間扉を閉じたままの部屋があります。

部屋の中は500年の間ずっと真っ暗でした。

この部屋の扉を開け外から光が差し込んできた場合、その部屋は扉が閉じられて真っ暗だった年月に比例して、少しずつゆっくりと明るくなっていくでしょうか？

そんなことはありません、部屋は一瞬で明るくなります。

過去世からいくつもの生を経て今生まで我々がずっと無知だったとしても、もし**解脱したらその無知は一瞬でなくなります。**別のイメージで考えてみてください

綿(わた)の山があるとします。

マッチを一擦りしてこの山に火をつけたら、この綿の山はゆっくりと時間をかけて燃えるでしょうか？　そんなことはなく、たちまち燃えてなくなります。

皆さんの罪(無知)がどれほどたくさん貯まっていても、心配しないでください。

ブラフマンの知識、または神の恩寵でそれはたちまち消え去ります。

今の二つのたとえ話は、『ラーマクリシュナの福音』からの引用です。

ですから皆さんは罪の大きさについて心配せずに、信仰することに集中してください。

**・知識と無知**

ギャーナについてもう一度第4章42節を見てください。

***されば、バーラタ王の子孫(アルジュナ)よ！　己の心の迷いと疑いを智識の剣で断ち切り、精神をヨーガに集中し、さあ、立ち上がって戦いなさい！』と。//4-42***

ここでは智識の剣というように、ギャーナを剣にたとえています。

ギャーナの反対を否定の接頭辞をつけてアギャーナと表現します。

**ギャーナ(Jnana:霊的知識)　　　　　アギャーナ(A-jnana:霊的無知)**

　　　　舟　　　　　　　　　　　　　　　　　海

　　　　火　　　　　　　　　　　　　　　　　薪

　　　　剣　　　　　　　　　　　　　　　　　迷いと疑い

第4章では智識と無知をこのようなたとえで対比しています。

ギャーナがどのように我々を助けてくれるのか、イメージがなければなかなか理解できません。

『ラーマクリシュナの福音』のなかにも、我々がイメージする助けとなるたとえ話が数多くあります。

霊的知識；私は肉体ではなく心でもない、私は魂、魂だけが永遠で親族も宇宙も一時的

霊的無知；私は肉体、私は心、宇宙は永遠、親族も永遠

今は罪に関連してお話ししていますが、ギャーナの影響はより包括的で根本的です。

罪は無知によってもたらされますが、**無知が生み出すのは罪だけではありません。**

**真理の知識は罪だけでなく、その源である無知をも消滅させます。**

それだけでなくさらに肯定的な言い方をすれば、ギャーナによって解脱することができ、その結果永遠の幸せと至福が得られ、苦しみがなくなり、自由と高い知性も得られます。

なぜギャーナがもたらす恩恵をこのように列挙するのかと言えば、皆さんにやる気を出してもらうためです。

ギャーナの知識を得るための条件については、詳しくは次回のクラスで説明しますが、最後に第4章34節、39節を読んでください。

***真理を体得した賢者をうやうやしく礼拝し、真心をもって仕え、真理を学ぶがいい。そうした聖師のみが、弟子に無上の知識を授けることができるのだから。//4-34***

***篤い信仰心をもつ人は、感覚の欲望を制御することで、この無上の智識を得、速やかに究極の平安の境地に到る。//4-39***

普通の勉強や頭の中の想像だけでは、この知識は得られません。

次回説明します。